校長室便り**青空**　東中の青空　　№351　2023.6.16

期末テスト最終日。
いつものように通用門の横断歩道手前に立ち、生徒を迎えた。
「あと一日。がんばって。」
と横断歩道を渡る背中に、心の声を送っていた。
すると、
「校長先生。」
２年生の〇〇さんがいつもより手前で自転車を降り、私に何か言おうとした。
こういう時は大体、通学路の途中で起きたことを話してくれる子が多かった。
「小鳥が死んでいた」とか「1 年の子の荷ひもが取れて困っているよ」とか。
〇〇さんはにっこりと近づいてきた。
「　校長先生、今日の空は　すっごくきれいな青空です。
　　ゆっくりと見てください　ね。　」
そう言って、さわやかな風のように横断歩道を渡っていった。
私は見上げた。
どこまでも　どこまでも　見上げた。
かぎりなく広がり視界からはみ出していく青空を。
地平に視線を移し、そばの田んぼに目を戻したあと、もう一度、見上げた。
藍のような深い青のところもあれば、浅瀬のような青もある。
宇宙船から地球を見渡した時の　水の星ような　ブルーもある。
２羽のツバメが　斜線を描いて　横切った。
白い雲は　生クリームのように　ふわりと散歩をしていた。
小さなおもちゃのような飛行機が　海の方へと消えていく。
この心地よさはなんだろう。
世界中のだれにも負けない　幸福感。
こころの色が　変わっていく。
白いヘルメットが近づいてきて　ふと我に返った。
いつもと変わらない「おはようございます」が
神聖な響き合いとなっていた。

〇〇さんが私に伝えたかったのは、青空の美しさだけだったのか。
澄み渡ったこころとこころの邂逅が　校舎内へと　歩んでいく。
「ああ、東中の空だ。東中の青空が、広がっている　ね。」
と、誰にともなく言葉を　ほうった。
つぎつぎと来る生徒に、スキップするようなリズムであいさつを交わす。
わたしは　青空になっていた。